OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第32号
発行責任者
大阪体育大学スポーツ局
局　長　宍倉保雄
編集長　和泉かよ子
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）479－3111
FAX（072）453－8972
協力＝教育後援会・学友会

大体大から羽ばたけ 田中駿汰（体育4年）

トゥーロン国際大会決勝戦の日本代表メンバー（後列左から2人目が田中）　©JFA/PR

U-22日本代表・ユニバーシアード日本代表
仏のトゥーロン、伊のナポリへ
大体大での日々を糧に躍動する

今年5月、U―22日本代表に選出され、活動の幅が広がった田中駿汰（体育4年）。Jリーガーを中心に構成される代表チームで大学生は4人しかおらず、田中は「大阪体育大学サッカー部がもっと強くなるよう自分の経験を還元したい」と誇る。MFとDFをこなし、3年生の時からセンターバックとして守備の要を担ってチームの勝利に貢献してきた。卒業後は北海道コンサドーレ札幌に加入が内定しており、来春からはJリーガーになる。

松尾元太監督は田中のプレーを「DFラインを統率して広範囲をカバーしながら、1本のパスで攻撃へのスイッチを入れることができる」と評する。

6月1日～15日までフランスで開催された第47回トゥーロン国際大会に日本はU―22日本代表で臨み、田中はグループステージで2戦目のチリ戦、3戦目のポルトガル戦に出場、ノックアウトステージでは決勝戦のブラジル戦に出場した。

日本はグループステージの初戦でイングランドに2―1と勝利、続くチリ戦に6―1と圧勝した後、ポルトガル戦は0―1で惜敗した。11年ぶりに4強入りを果たしたが、決勝戦のブラジル戦はPK戦の末にメキシコをPK戦で破ったが、決勝戦のブラジル戦は0―1の大接戦でPK戦にもつれ込み、PK戦で4―5の敗北、涙を飲んだ準優勝だった。田中は「前半の失点は、守備陣がもっと集中していたら防げたと思う」と悔みながらも、「外国人選手はパワーもスピードもあるし、ジャンプも高い。こういう違いを肌で感じる貴重な機会だった」と国際大会から多くを学んだ。

普段は一緒に練習することもないメンバーで構成される日本代表チームに参加して、田中は「仲間とたくさんしゃべることを心掛けた」と言う。自分のことを知ってもらいたい、仲間のことをもっと知りたい、コミュニケーションによって人間関係を築くことがプレーのレベルを高めるという信念からだ。宿泊先のホテルでは日本代表は同じ場所で一緒に食事を取るため、この際に積極的に話し掛けるようにし、「ほとんどサッカーと関係ない話ばかりしていました」と笑う。

トゥーロン国際大会から日本に戻って、6月末の関西学生サッカー選手権大会を戦い、7月3日からイタリアの第30回ユニバーシアード競技大会に出場する。強行軍とも言えるスケジュールだが、田中の体調管理に秘訣は「よく寝て、よく食べる」と単純明快。

× × ×

イタリアのナポリで開催されるユニバーシアードには同じ大阪体育大学サッカー部のFW林大地（体育4年）も参加する。田中と林は中学生の時にJリーグ「ガンバ大阪」のジュニアユースで出会い、高校ではどちらも大阪の履正社高校に進学。中学から大学まで共にサッカーボールを追った「竹馬の友」のような関係であり、田中は林のことを「言葉がなくても気持ちが通じる」と話す。

そろってユニバーシアードの参加選手に選ばれるまでになっても、高校時代から海外の選手とは試合をしてきたので国際大会に特別な気負いはない。1日1日を大事にするだけです」と言いつつ、「やっぱりユニバーシアードではシュートを決めて点を取りたい」とFWの戦闘意欲が隠せない。田中は「ナポリでもよく寝て、よく食べ、よくしゃべります!!」と明るく宣言した。

共にユニバーシアードに参加する林大地（写真右＝体育4年）とは中学生時代からチームメイト。「言葉がなくても気持ちが通じる」仲だという。

© JFA/PR

来春からJリーガー
北海道コンサドーレ札幌入団内定

左より、北海道コンサドーレ札幌の竹林京介強化部長、田中、松尾監督

速報　第30回ユニバーシアード競技大会（サッカー）

男子優勝　女子準優勝
大体大から3選手が貢献
田中駿汰（㈱4年）・林大地（㈱4年）・今田怜那（㈱4年）

大阪体育大のサッカー部（男子・女子）は、イタリアのナポリで7月に開催された第30回ユニバーシアード競技大会に男子が田中駿汰と林大地、女子は今田怜那（2面参照）が日本代表に選出された。男子は決勝戦で4―1の大差でブラジルを破って優勝、女子は決勝戦に進出するも2―1で朝鮮民主主義人民共和国に敗れ惜しくも準優勝となった。

田中はグループリーグ2戦と準々決勝、決勝にすべて先発出場。林はグループリーグ2戦と準決勝に出場し、先発出場したグループリーグ第2節のロシア戦（4―1）では、事前の宣言通りにシュートを決めて1得点した。

今田はグループリーグから準々決勝、準決勝、決勝とすべての試合に出場し、チームの準優勝に貢献した。

待ってろ総理大臣杯

男子サッカー

第48回関西学生サッカー選手権

大会初の失点から延長戦 激闘もベスト4で終える

6月2日～30日　大阪市・ヤンマーフィールド長居ほか

夏に行われる「第43回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント」の関西地区予選となる関西学生サッカー選手権で、昨年に続いて優勝を狙う大阪体育大は準決勝に駒を進めたが、びわこ成蹊スポーツ大と大接戦の末、PK戦で敗れ決勝戦に進めなかった。

6月26日の準決勝は4、5月に行われた関西学生サッカーリーグで優勝の大体大と2位のびわこ大との対決。序盤は大体大が優位にゲームを進めるが、前半の半ば過ぎから初の決勝進出を目指すびわこ大の追い上げが始まる。前半29分にびわこ大のFW青山景昌がゴールポスト左隅にシュートを決め、大体大は今大会初失点。大体大の攻撃が盛り返すも、無得点で折り返した。68分、猛烈なドリブルでゴールに突進する大体大のFW林大地（体育4年）がペナルティエリア内で反則プレーに倒れ、自らペナルティキック決めて1―1の同点とした。大体大は更に攻め続けたが、びわこ大のGK田中勘太のファインセーブで勝ち越せず、1―1で90分間を終える。延長戦で大体大はDF大崎航詩（同3年）らが何度もチャンスメークしたものの実らず、勝負はPK戦にもつれ込んだ。

PK戦はびわこ大に2度阻止されて結果は3―4。大体大はびわこ大の「守り」を崩せず敗戦した。4強に残ったことで大学日本一決定戦の第43回総理大臣杯（8月29日～9月7日）への出場権は獲得できているが、今大会で決勝戦に進めずシード権は得られなかった。

◆　◆　◆

6月30日に万博記念競技場で行われた大阪経済大との3位決定戦は、ユニバーシアード競技大会代表のDF田中駿汰（同4年）とFW林大地を欠いた試合。主力2選手がいないとはいうものの、0―1でまさかの敗北を喫した。総理大臣杯には気持ちを切り替えて臨むのが必至だ。

同点弾を決めた林大地

男子サッカー

全員守備の堅守で戦い抜く 目指すは〝不動の関西王者〟

スター軍団の背中を見て這い上がってきた選手たち

第97回関西学生サッカーリーグ（前期）は、8勝、1敗、2引き分けとし、首位で折り返した。昨年はJリーガーを4人輩出したスター軍団で、その4年生たちが卒業した後、今年はセカンドチームから上がってきた3年生が多い。リーグ戦に臨むにあたり、松尾元太監督は「若い選手たちがどれだけがむしゃらになって戦えるかが勝利のカギになる」と話していたが、選手たちはその期待に応え、細かいところにまでこだわった日ごろのトレーニングの成果を発揮した。

フォワードの選手も守備から前線でプレスをかける「全員守備」をモットーにチーム作りをしており、11試合で7失点しかしていない。福島充コーチは「最後の15分ぐらいでスタミナ切れしてしまうのが失点に結びついているので、最後まで守り切れるようにしたい」と更に鉄壁の守備を目指す。

3年生が多いのが特徴だが、やはりチームをまとめるのは田中駿汰（体育4年）、FW林大地（同）、MF西田恵（同）ら4年生。U−22日本代表の田中はDFとMFをハイレベルでプレーでき、スピードに乗ったドリブルを武器に持つ林大地は高い得点力を誇る。西田は今回のリーグ戦でアシストランキング2位になった中盤の要だ。

4年生の背中を追って後輩たちも育っている。複数の守備的ポジションをこなす林尚輝（体育3年）は戦術の幅が広く、DF木出雄斗（同）は今リーグ戦のアシストランキングで西田に続く3位の活躍をした。GKの泉森涼太（体育2年）は集中力が高く、ファインセーブだけでなく、ゲーム展開に素早く対応し「攻撃するキーパー」でもある。1年生の有望株はMF野寄和哉（体育1年）。プレー中に相手チームの選手に取り囲まれても動揺せずに力を発揮する強心臓の持ち主で、ゲームの流れができていない中でも得点チャンスを生み出す突破力がある。

昨年とはまた違った持ち味のメンバーで、不動の「関西王者」を目指し、鍛錬が続く。

泉森涼太（体育２年）

木出雄斗（体育３年）

林尚輝（体育３年）

西田恵（体育４年）

野寄和哉（体育１年）

アフラギ・マハディ（体育４年）

永吉広大（体育３年）

大崎航詩（体育３年）

関西学生サッカー（前期）リーグ首位

◆試合結果
4／6○ 大阪体育大学2−0関西福祉大学
4／14○ 大阪体育大学3−0大阪産業大学
4／17○ 大阪体育大学4−1大阪経済大学
4／27○ 大阪体育大学2−0近畿大学
4／30○ 大阪体育大学3−0京都産業大学
5／3○ 大阪体育大学4−1立命館大学
5／5● 大阪体育大学1−2阪南大学
5／18△ 大阪体育大学1−1びわこ成蹊スポーツ大学
5／25○ 大阪体育大学2−1桃山学院大学
6／1○ 大阪体育大学3−0関西大学
6／9△ 大阪体育大学1−1関西学院大学

第97回関西学生サッカーリーグ（前期）
4月6日〜6月9日／J・GREEN堺ほか

女子サッカー

決めた！途中出場山根（体育2年）勝利呼び込むドンピシャヘッド！

殊勲弾の山根夢乃（体育２年）

的場望杏（体育１年）はアシストでも活躍

井澤優芽（体育３年）は５得点で得点ランキング２位に

チームの心臓、キャプテンの鈴木千尋（体育４年）

リーグ得点王とアシスト王を獲得した今田怜那（体育４年）は攻守共に強さを見せる

関西女王の座を争う姫路獨協大に勝利し、令和初の関西学生女子サッカー春季リーグは大阪体育大が優勝した。昨年度は春季リーグで優勝したが、秋季リーグで2位に。今季は1位を奪還して秋に向けて練習にもますます熱が入っている。

最終戦の姫路獨協大戦は1−1で迎えた終盤、途中出場のFW山根夢乃（体育2年）がゴール前で見事にヘディングシュートを決めて勝利をものにした。MF今田怜那（同4年）は攻撃と守備と両面で強さを発揮する選手で、7月前半にイタリア・ナポリで開催された第30回ユニバーシアード競技大会のメンバーにも選ばれた実力。キャプテンのMF鈴木千尋（同）はゲームメークがしっかりできるチームの心臓だ。この2人を中心に1年生から4年生まで各学年の選手がバランスよく入る今年のチームでは、1年生たちも勝利に貢献した。

今田はリーグ戦全体で7得点を挙げて得点王に、続いてMF井澤優芽（体育3年）が5得点で2位。アシストでは今田が9アシストでアシスト王にもなり、鈴木とDF的場望杏（同1年）は4アシストで2位タイの活躍だった。石居亘子監督は「ずば抜けた何かを持つ選手はいないけれども、各自のいいところを生かして戦えるチームと評する。

課題から導き出した走り負けないサッカー

今年は春季リーグ開始前に各地のサッカーイベントなどに参加して、高校生も含めいろいろなチームと試合をした。そこで見えたのは、足が止まって競り負けてしまうパターンだった。サッカーの試合90分中、選手は10㌔ぐらい走る。「リーグ戦に向けて最低3㌔は走り切れるよう練習でしんどい状況を作って、走力強化にフォーカスしたトレーニングをした」と石居監督。不利な状況になっても踏ん張りがきくようになってきたという。

卒業後は学校教諭やスポーツの指導者を希望する選手が多く、石居監督は練習メニューを学生自身が考えるようにしている。単にサッカーが好きというだけではなく、指示通りに体を動かすだけでもなく、石居監督は「サッカーを理解しよう、勉強しようという真摯な探求心を持ってサッカーができるようになればうれしい」と話す。技術を高めながら思考を深める、それが大阪体育大の女子サッカー部だ。

◆試合結果
5／5○ 大阪体育大学8−0神戸親和女子大学
5／12○ 大阪体育大学8−1関西学院大学
5／19○ 大阪体育大学2−1明治国際医療大学
5／26○ 大阪体育大学4−1武庫川女子大学
6／2△ 大阪体育大学1−1聖泉大学
6／9○ 大阪体育大学6−0追手門学院大学
6／16○ 大阪体育大学2−1姫路獨協大学

関西女子サッカー春季リーグ優勝

2019年度関西学生女子サッカー春季リーグ
5月5日〜6月16日／大阪体育大学ほか

	天理大学	大阪産業大学	甲南大学	関西国際大学	関西外国語大学
大阪体育大学	5△5　4/19	7△7　4/27	1⊙0　5/5	1●5　5/12	10○1　4/13
	3○2　4/20	2⊙1　4/28		6○2　5/13	
	2○1　4/22	2●5　5/21	16⊙11　5/6	11⊙4　5/14	7○2　4/14
		5⊙3　5/22			

阪神リーグ優勝を決め、中野和彦監督を胴上げして歓喜する野球部員ら＝万博記念公園野球場で

2019年度阪神大学野球連盟春季リーグ

4月6日～5月26日／大阪府吹田市・万博記念公園野球場ほか

4月6日～5月26日に開催された阪神大学野球連盟の2019年度春季リーグ（1部）で、5季ぶり38回目の優勝を果たした。2016年度秋季を制したあと、2018年度春季には最下位に沈むなど優勝から遠ざかり、主将の駒方公紀（体育4年）は「このままでは来年のチームは、いい選手ばかりになる」と心配したという。そんな危機感をバネに今季は快進撃を見せ、第68回全日本大学野球選手権（東京・明治神宮球場で開催）への切符をつかみとった。

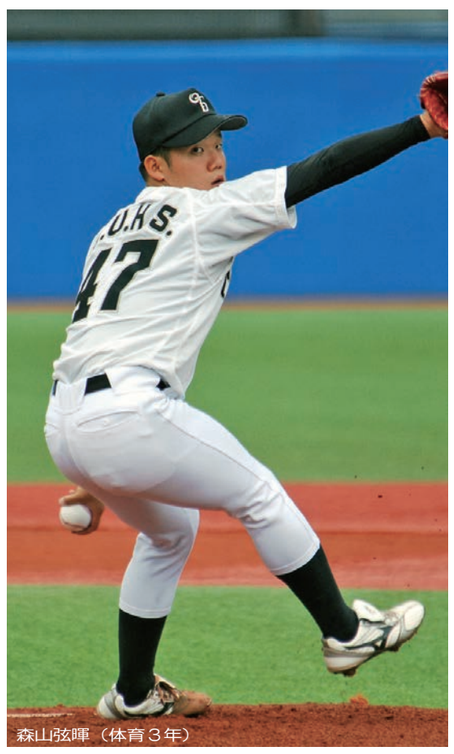
守備徹底強化で「完全優勝」

チームは2部降格の恐れもあった昨春の反省から、地道な練習を積み重ねて守備を徹底的に強化。秋のリーグでは2位に浮上した。そして、今春は投手陣の厚みが増した。二枚看板の中村光（体育3年）と森山弦暉（同）に、位田（いんでん）遼介（体育1年）が抑え役として加わったのだ。打撃陣も鋭いスイングに磨きをかけた。

リーグが開幕すると、投打の歯車がかっちりかみ合い、関西外国語大、天理大、甲南大から勝ち点をゲット。1勝1敗で迎えた5月14日の関西国際大との試合で、打っては駒方の3ランなど11得点、投げては中村、位田のリレーで相手打線を4点に抑え、優勝を決めた。胴上げで宙を舞った中野和彦監督は「個々の力はもう一つだが、まとまりがあって、点を取られても何とかなるという雰囲気があった」とリーグ戦を振り返った。スーパー1年生、位田の働きには、柳田侑樹コーチが「彼がいなかったら優勝はなかった」と舌を巻く。

結局、5月22日に大阪産業大からも勝ち点を奪い、最終成績は10勝2敗2分。他の5チームすべてから勝ち点を挙げる「完全優勝」を成し遂げた。打撃陣を力強く引っ張った出雲亮冴（体育4年）が最優秀選手賞、5勝をマークした中村が最優秀投手賞を受賞。ベストナインには4勝の森山＝投手、主将の駒方＝遊撃手、功打の高橋直政（同）＝外野手＝の3人が名を連ねた。

中村光（体育３年）


森山弦暉（体育３年）

位田遼介（体育１年）

"神宮"への熱い思い

4年生の駒方と出雲は2016年度の秋季リーグ優勝時に1年生で、明治神宮野球大会を経験した。再び神宮球場の土を踏むには、今年が最後のチャンス。駒方は「神宮球場は普段使っている球場とはグラウンドの感触も違うし、観客が多いので観客に気を取られてプレーに集中できなくなったりする」と独特の雰囲気があると言う。何としても後輩たちに"神宮"を経験させ、大舞台で堂々と戦えるチームにしなければ―。駒方はそれだけを考えていた。

柳田コーチは「神宮に対する4年生選手の熱い思いがチームの団結を強め、優勝につながったのは間違いない」と断言した。

1回戦の勝利を喜ぶ野球部員

第68回全日本大学野球選手権大会

6月11、12日／東京都新宿区・明治神宮球場

2回戦敗退も、接戦を糧に

6月の全日本大学選手権では、1回戦で高知工科大と対戦。序盤に2点を失ったが、6回に木村翔（体育3年）の2ランで追いつき、タイブレークとなった10回、大西進太郎（同）の適時打でサヨナラ勝ちした。東京農業大北海道との2回戦では1、2回に1点ずつ取ったものの、8回に逆転3ランを打たれ、惜しくも敗れた。だが、神宮球場という大舞台で繰り広げられる接戦は、選手たちの大きな糧となった。

1回戦でマウンドに立った中村は「メンバーに入れなかった仲間の大きな声援が聞こえ、つらい場面で精神的に助けられた。結果的に〝1球〟で負けてしまったので、秋季リーグ戦は1球を大切にして、また神宮球場でこの悔しさを晴らせるよう頑張ります」と宣言。

駒方は「1本のホームランで負けた悔しい試合だった。でもだからこそ、この試合を経験したことで、神宮出場に浮かれることなく気を引き締めることができたと思う」と後輩たちに大体大野球部の未来を託した。

坂井慎平（体育３年）

主将の駒方公紀（体育４年）

第68回全日本大学野球選手権大会のスコア
1回戦（6月11日）　高知工科大　2―3　大阪体育大
2回戦（6月12日）　東京農業大北海道　3―2　大阪体育大

貫禄のアベック全勝優勝！
男子7季連続、女子14季連続

ハンドボール

常に全国の頂点を狙う強さを誇る大阪体育大学のハンドボール部。今年も関西学生ハンドボール春季リーグでは男女ともに全勝優勝を果たした。今大会で男子は7季連続79回目、女子は14季連続37回目の優勝で、女子は対学生連勝記録を165に伸ばした。最優秀選手賞に男子は堀田陽大（体育3年）、女子は相澤菜月（同3年）が選ばれ、優秀選手賞には男子が木本惇貴（同4年）と松下海（同3年）、女子は秋山静香（同4年）と榎和奏（同）が選ばれた。

2019年度関西学生ハンドボール春季リーグ

4月6日～5月19日／大阪市・大阪経済大学ほか

最優秀選手賞に選ばれた相澤菜月（体育3年）

全日本7連覇に向け、気の緩みなし

楠本繁生監督

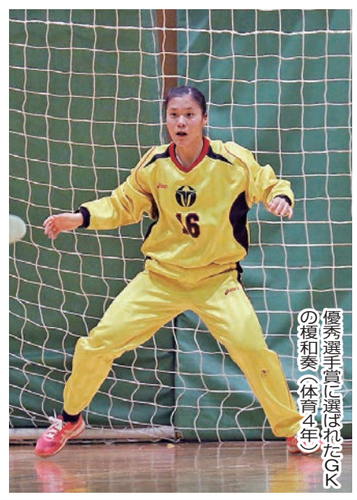
連戦連勝街道をばく進し、もはや女王の座に君臨することが宿命づけられた大阪体育大学の女子ハンドボール部。今大会は多くの選手を色々なポジションで登場させ、まさにチーム全員でリーグ戦を戦い抜いた。昨年の優勝メンバーからディフェンス、オフェンスの要とGKが抜けたが、新メンバーをチャレンジングに起用しながら着実に勝利することができた。

5月19日の武庫川女子大学との試合では、先制点を挙げたものの、ミスもあり逆転を許してしまう。追う展開となって3連続得点で逆転。その後は一度もリードを許さず前半を終えた。後半は選手を入れ替えつつ、早い展開から得点を重ねリードを広げていく。メンバー入りした16名（GK2名含む）のうち12名が得点を挙げるなど、多彩な攻撃で相手を寄せ付けず、ディフェンスでも相手の得点を5点に抑え、44―16で快勝。男子と同様に全勝優勝を成し遂げた。

岡田彩愛（体育1年）

中山佳穂（体育3年）

優秀選手賞に選ばれた秋山静香（体育4年）


優秀選手賞に選ばれたGKの榎和奏（体育4年）

試合後、楠本繁生監督は「個人として、チームとしての課題が明確になったので夏から秋に向けて修正したい」と冷静にリーグを振り返った。次なる目標は全日本インカレの7連覇だ。主将の秋山は「戦術や失点の仕方などの課題を修正して、あくまで挑戦者という気持ちを忘れずに頑張ります」と優勝に浮かれてはいない。関西ではずば抜けた戦力を誇るが、強豪ぞろいの関東のチームにはわずかな気の緩みが敗北につながりかねない。全国制覇に向け「勝って兜の緒を締めよ」の精神を忘れない女王軍団だ。

メンバー離脱乗り越え西日本へ

最優秀選手賞受賞の堀田陽大（体育3年）

昨年、17年ぶりに全日本学生ハンドボール選手権（全日本インカレ）で優勝を果たし、チームの雰囲気は上げ潮に乗っている。昨年の優勝に貢献したエースの橋本駆（体育4年）とGK堀田が残っており、選手層の厚みは関西屈指だ。ただ今季は、主力メンバーが次々にけがに見舞われて試合を離脱し、ベストメンバーで戦えたわけではない。

5月19日に行われた関西大学戦は、序盤はお互いに点を取り合ったが、徐々に相手を引き離して4点リードで前半を終えた。後半は主将の木本を中心に攻守で主導権を握って優位に試合を進め、梶山瑞生（同1年）、矢村裕斗（同）らフレッシュな選手の活躍も加わって、35―26で勝利。全勝優勝を成し遂げた。

試合後、下川真良監督は「序盤は悪くなく、優位に進める試合が多い点は良かったが、点差が開いた展開において油断から点差を詰められることがあった。西日本インカレに向けて、甘さをなくしていきたい」と今回のリーグを振り返った。また、主将の木本は「（今回のリーグ戦では）ベストメンバーで戦うことができなかったので、次は万全に戦えるようにしたい。女子に続いて連覇記録を伸ばすよう優勝をつなげていきたい」と語った。

下川真良監督

優秀選手賞受賞の木本惇貴（体育4年）

山本和矢（体育2年）

朝長徹太（体育4年）

梶山瑞生（体育1年）

矢村裕斗（体育4年）

優秀選手賞受賞の松下海（体育3年）

バレーボール

2019年度関西大学バレーボール連盟春季リーグ

4月7日～5月19日／東大阪市・近畿大学記念館ほか

2019年度関西大学バレーボール連盟春季リーグ戦は、男子が9位、女子が10位となった。最終節は5月19日、東大阪市の近畿大学記念会館で行われた。男子は戦績3勝7敗で天理大と、女子は2勝8敗で園田学園女子大と対戦した。

男子 リーグ戦9位
天理大戦は勝利
課題は攻撃力アップ

男子の天理大戦は、セットカウント3―2で勝利。攻撃は濱口幸人（体育2年）、架谷也斗（同）、松岡大樹（同）を軸に展開した。中でも、濱口は得意とするバックアタック9得点を含むアタック合計24得点、サーブ得点1点と、春季リーグ個人得点ランキング14位にふさわしい活躍だった。守備では、リベロ堀田晃雅（同）が個人サーブレシーブ成功率ランキング2位になる粘り強さを見せ、ブロック個人ランキング2位の福島卓巳（体育3年）のブロック6得点が勝利に貢献。天理に勝って春季リーグ戦を9位で終了した。龍谷大、大阪産業大、近畿大、立命館大とは、攻撃面での力差が大きく、攻撃力アップが欠かせないことが見えたリーグ戦だった。

◆◆◆

女子の園田学園女子大戦は、昨季は勝利しており今季も期待したが、セットカウント0―3で敗北する悔しい結果となった。個人では、黒田祥代（同4年）は個人アタック決定率ランキング11位、高橋侑里（同4年）は個人得点ランキング5位。守備面では、河嶋可林（同2年）がブロック得点3得点と、個人ブロックランキング5位になった。

サーブレシーブ成功率ランキング7位のリベロ川口夏実（体育4年）も奮闘したが、ブロックの横や後ろのディフェンス側の穴を狙うフェイントを多用されてじりじりと得点を重ねられてしまい、守備面での強化の必要性も感じられる試合となった。

キャプテンの高橋は「主力メンバーが抜けて決定力が落ちてしまった。攻めるサーブでゲームの流れを作ることができるチームなので、この強みを生かした戦いができるようバレーボール以外での行動から考え方を変えていく」と話している。

女子 悔しい10位
高い個々の能力
守備面強化が課題

黒田祥代（体育4年）

白崎莉香子（体育1年）

高橋侑里（体育4年）

濱口幸人（体育2年）

天理大との試合を戦うメンバー

架谷也斗（体育2年）

水泳競技

男女とも金銀銅メダル 大学入り後の伸びしろ大

第7回関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会

5月18日、19日　大阪市・丸善インテックス大阪プール

関西学生チャンピオンシップでは、大阪体育大学は男女ともに好成績を収めた。水泳は大学生の年代になると記録の伸びは鈍化するのが一般的だが、大阪体育大学では大学に入学してから急成長する選手が多い。

1年生一気に15人入部 プール手狭でうれしい悲鳴

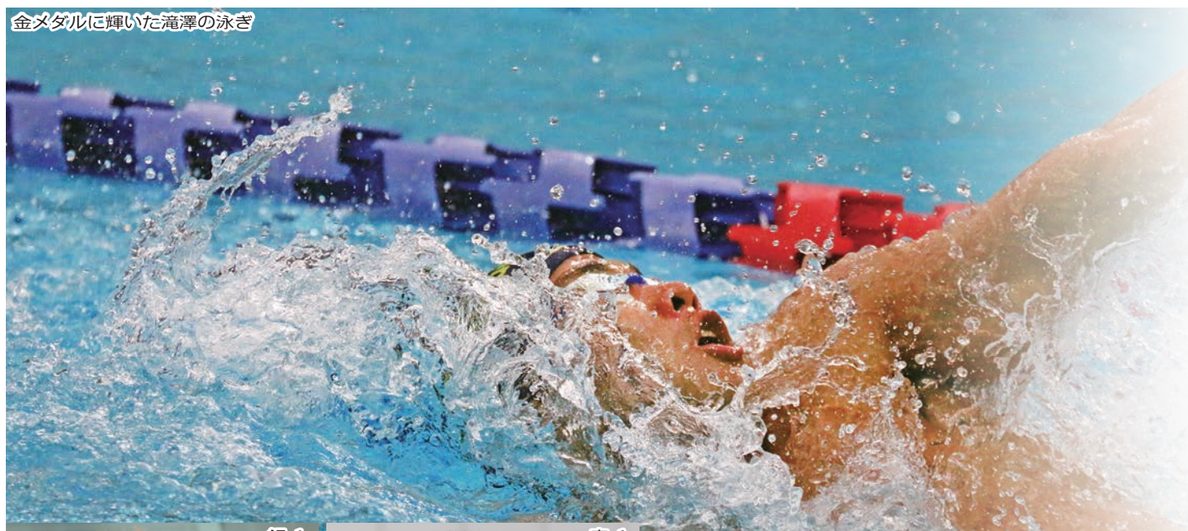
男子水上競技部の尾関一将監督は「伸び率では全国の大学の中で3本の指に入ると言われる。学生の成長ぶりが目の当たりにできるので、私もとてもやりがいを感じている」と話す。これが評判になったのか、今年は1年生が15人も入部し、「全部で25人ぐらいだったのが一気に40人に増えた。プールが狭くなってしまい、練習方法を考え直さないといけなくなった」と尾関監督は苦笑いする。

とは言え、伸びしろが楽しみな1年生が部全体を活気づかせている。森圭佑（体育1年）は関西学生チャンピオンシップの100㍍平泳ぎで2位になり、武田力紀（同）は100㍍自由形で5位、200㍍自由形で6位に食い込んだ。また、3位になった400㍍と800㍍のフリーリレーには合わせて3人の1年生が出場した。

今年はリレーで新たな挑戦をしている。前の選手が戻ってくるのと同時に次の選手が飛び込む「引き継ぎ」で、スタート台の上をステップして勢いをつける方法を取り入れた。スタート台後方で待機するので前の選手がゴールしたかどうか確認が難しく、タイムは伸びるがフライングの危険が大きい。関西学生チャンピオンシップでは400㍍メドレーリレーでダントツ1位のゴールをしながら、フライングで失格になった。尾関監督は「この引き継ぎは、フライングを恐れていては成功しない。技を磨いて成功度を上げ、9月のインカレではリレーの決勝に出場したい」と意気込む。

女子も大学に入ってから成長著しい選手が目立つ。関西学生チャンピオンシップでは、実力者のキャプテンの佐藤蓮（体育4年）は、長年のライバルに競り勝って、400㍍自由形で金メダル、800㍍自由形で銀メダルに輝いた。フォームの改造に成功した雑賀睦希（同3年）は、低迷期を完全脱出。3年前の自己ベスト記録と全く同じタイムで泳ぎ切り、その後、別の大会で自己ベストを更新して国体出場を勝ち取った。ウエイトトレーニングの効果が出た丹下明希（同4年）は、4年生になってからベストタイムの更新が止まらず、「遅咲きの逸材」として周囲を驚かせている。

浅野晃平コーチは「予想を裏切ってタイムを伸ばす選手は、うれしい新発見。今まで見たことのないドラマの世界が広がっていて、他の選手の刺激にもなる」とワクワク感を語る。男女ともに目が離せない水上競技部だ。


金メダルに輝いた滝澤の泳ぎ

100㍍平泳ぎ銀メダルの森圭佑（体育1年）

100㍍バタフライ銅メダルの春岡草太（体育2年）

迫力ある福山のスタート

200㍍バタフライ金、100㍍バタフライ銀メダルの福山傑（体育4年）

100㍍背泳ぎ金メダルの滝澤有哉（体育4年）

100㍍自由形銅メダルの丹下明希（体育4年）

50㍍自由形銀メダルの雑賀睦希（体育3年）

400㍍自由形金メダルの佐藤蓮（体育4年）

800㍍フリーリレーのメンバー。左から丸山、泉、村田、武田

400㍍フリーリレーのメンバー。左から白山、武田、市川、丸山

リレーで丹下を応援する雑賀（左）と佐藤

スタート前に気合いを入れる滝澤

◆上位に入賞した成績

【男子】
1位　100㍍背泳ぎ　滝澤有哉（体育4年）▽200㍍バタフライ　福山傑（同）
2位　100㍍バタフライ　福山傑▽100㍍平泳ぎ　森圭佑（体育1年）
3位　100㍍バタフライ　春岡草太（体育2年）▽400㍍フリーリレー＝白山直樹（体育3年）、武田力紀（同1年）、市川舜明（同2年）、丸山康之（同4年）▽800㍍フリーリレー＝丸山康之、泉大雅（体育1年）、村田勇輝（同）、武田力紀

【女子】
1位　400㍍自由形　佐藤蓮（体育4年）
2位　50㍍自由形　雑賀睦希（同3年）▽800㍍自由形　佐藤蓮
3位　100㍍自由形　丹下明希（同4年）

バスケットボール

惜しくも西日本ベスト16

第69回西日本学生バスケットボール選手権大会

6月2日～9日／大阪市・エディオンアリーナ大阪ほか

昨年の西日本学生バスケットボール選手権大会で大阪体育大は、4回戦で強豪の中京大に負けたが、今年は4回戦を勝ち残り準々決勝に進んだ。6月6日の準々決勝の相手は昨年の4回戦と同じ中京大。リベンジを目指すが58―90で敗れ、結果はベスト16だった。

キャプテンの生越陸也（体育4年）は「目標としている結果ではなかった。4クウォーター目で疲れやミスが出てしまい負けてしまった」と話す。毎年、春の大会では教育実習で多くの4年生が抜けてしまうため、3年生以下が主体のチームで挑むことになる。今大会では、教育実習中で試合に出られない生越に代わって藤本巧太（同3年）がキャプテンを務めてチームを引っ張り、シューティングガードの原勇気（同2年）などが活躍を見せた。

今年のチームでは昨年よりも個人の練習に力を入れている。チーム内の競争も激しい中で、選手たちは学年問わず日々切磋琢磨し、チーム全体のレベルアップを試みる。生越は「4年生が揃う秋のリーグ戦に向けて仕上げていきたい」と秋に向けての意気込みを語った。

藤本巧太（体育3年）

アデバンジョ・ウィリアム（体育2年）

全関西雪辱ならず準優勝！ 西日本はベスト16

第40回全関西女子学生バスケットボール選手権記念大会

4月13日～5月4日／大阪府門真市・東和薬品ラクタブドームほか

第68回西日本学生バスケットボール選手権大会

6月3日～9日／大阪市・エディオンアリーナ大阪ほか

大吉まな（体育1年）

大阪体育大は第40回全関西女子学生バスケットボール選手権記念大会で昨年と同様、決勝戦に進み、昨年と同じ大阪人間科学大に65―75で敗れ準優勝。雪辱は果たせなかった。昨年はベスト8だった西日本学生バスケットボール選手権大会では、準々決勝で愛知大に62―98で敗れて準決勝には進めず、ベスト16にとどまった。

今年のチームは4年生がキャプテンの新田桃子（体育4年）だけで、試合経験が少ない選手が多いという弱点がある。三根由香里コーチは「みんなものすごく頑張り屋。ただ真面目すぎて雰囲気が大人しく、チームワーク強化のためには劣勢の時に気分転換してくれるムードメーカーを育てたい」と話す。インド出身のアンテモールプリート・コール（体育1年）を大学初の留学生として迎えており、身長180センチで手足が長い体格のプレーは迫力満点。コールの存在がチームの起爆剤になるもの期待されている。

清水梨央（体育3年）

なぎなた

福岡（体育4年）個人戦優勝！ 演技競技は貴重な準V

第38回関西学生なぎなた選手権大会

近畿大学記念会館別館で6月16日に行われた第38回関西学生なぎなた選手権大会では、大阪体育大学は演技競技で活躍した。2人1組で技の正確さを競い合う演技競技の「有段の部」で赤堀桃子（体育2年）、西平春菜（同4年）組が準優勝。防具を付け定められた打突部位を確実に早く打突することを競い合う試合競技の「団体の部」でも準優勝した。試合競技の「個人戦二・三段の部」では福岡歩（同）が優勝した。

主将の福岡歩（体育4年）

準優勝した赤堀（右）、西平組

6月16日
近畿大学記念会館別館

生活最後の今年、1年の西日本インカレ以来、3年ぶりに大会出場。空き時間なども利用して稽古し、赤堀と強い信頼関係を築いた。決勝戦で惜しくも敗れたが、貴重な準優勝を勝ち取った。

試合競技、団体の部は、5人1チームで戦う。今大会は3年生を中心としたメンバー構成。リーグ戦で行われ、わずか1勝の差で準優勝となった。昨年は入賞を逃しており、成績を上げた喜びと優勝できなかった悔しさが入り混じった。

試合競技「個人戦二・三段の部」で優勝した福岡は、今大会は教育実習と重なったこの部門のみの参加。教育実習中はあまり稽古できず、完璧に調整ができていない状態だったが、1本を取ることにこだわり、気持ちで勝つことを心掛けて優勝をつかんだ。

多くの課題を発見し、夏の全日本インカレに向けてやるべきことが明確になった大会で、目標の三冠を達成できるよう、個人技能はもちろん、チーム力も高めていく。

なぎなた部主将
福岡歩（体育4年）

体操競技

男子 14年連続団体優勝（西日本インカレ5位）
女子 エース欠くも準V（西日本インカレ3位）

関西インカレ

近年、男女ともに着実にレベルを上げている大阪体育大学の体操部。男子は第61回関西学生体操選手権大会（関西インカレ）で14年連続の団体優勝を遂げ、続く第69回西日本学生体操選手権大会（西日本インカレ）では団体5位。一昨年の8位、昨年の7位からさらに順位を上げた。女子は関西インカレではエースを欠きながらも団体で準優勝、西日本インカレは団体3位の成績を収めた。

第61回関西学生体操選手権大会（体操競技の部）
4月18、19日／和歌山市・和歌山県立体育館

第69回西日本学生体操選手権大会（体操競技の部）
5月31日～6月2日／愛知県豊田市・スカイホール豊田

チームワークで個人競技高める

関西インカレで男子個人総合は、エース加藤大貴（体育3年）がトップの成績。これに上田颯（同）、キャプテンの佐敷亮仁（体育4年）が2、3位と続き、体調が万全ではなかった高島康平（同）も5位に食い込んだ。上位10人中8人を大阪体育大学の選手が占め、層が厚みを増している。

体操は個人競技だが、選手間の互いの励ましや配慮が競技の出来栄えに影響する。藤原敏行監督は「チームとして課題、目標点を設定して練習に取り組んでいる。チームワークによってプレッシャーに負けない精神面の強化をしている」と話す。西日本インカレでは出場した6人が6競技すべてで大きなミスをしなかった。「36競技をノーミスでそろえるのはとても難しい。チームがやり遂げてくれた。チームとして気持ちがまとまった団結力の成果だと思う」と藤原監督は評価する。次の目標は全日本インカレの順位を上げることで、今年は6～8位を目指す。

加藤大貴（体育３年）

上田楓（体育３年）

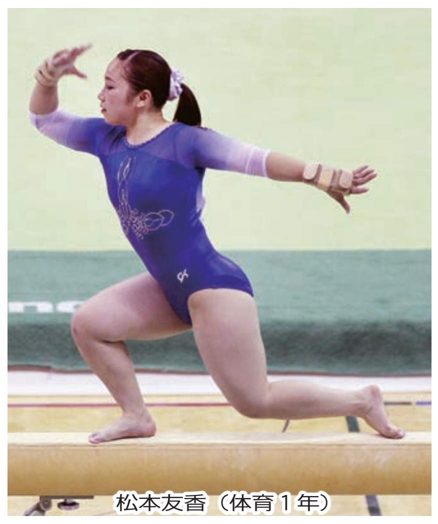
佐敷亮仁（体育4年）

ベストメンバーで全日本インカレへ

女子はエースの竹谷清花（体育4年）がけがで関西インカレを欠場。柳川友紀（体育1年）、常國萌々子（同2年）が個人総合の4位、5位に入る活躍でチームを支えた。西日本インカレでは竹谷が復帰、脚力を発揮して個人総合7位に入る演技を見せた。柳川、常國は関西インカレでの奮闘が影響して足を傷め、西日本インカレは段違い平行棒のみの出場。飛山紗希（同3年）、松本友香（同1年）らが健闘し、団体3位の座を獲得。

田原宏晃監督は「故障中の選手の穴を、別の選手が頑張って埋めてくれた。チーム全員がそれぞれの力を伸ばし、実力が底上げされてきた」と話す。女子も男子と同様に、演技で大きな失敗が少ないのが特徴だ。全日本インカレには何としてもベストメンバーで臨み、7位以内を狙う。

竹谷清花（体育4年）


松本友香（体育１年）

飛山紗希（体育3年）

第17回全国都道府県対抗日本拳法大会
7月7日／名古屋市・千種スポーツセンター

日本拳法

日本拳法部主将角野晃平（体育4年） 全国大会で最優秀選手に選出
大阪府代表として昨年の雪辱晴らす

大阪体育大の日本拳法部主将、角野晃平（体育4年）が第17回全国都道府県対抗日本拳法大会の大阪府代表メンバーに選出され、7月7日に名古屋市で行われた大会の「成人男子の部」に出場した。5人の選手が戦う都道府県対抗戦で、大阪府は見事に優勝。角野は6戦全部に出場して全勝し、最優秀選手に選ばれた。昨年、大阪府は決勝戦で負けて準優勝になり、今年はその雪辱を晴らした。角野は昨年に続く2度目の出場。自衛隊員など社会人の強豪をなぎ倒し、学生で日本拳法選手の頂点に立った。

角野は「強くなるために人一倍努力してきた。実力が認められてうれしい」と最優秀選手の受賞を喜んだ。攻撃系の技を得意とし、中でも鍛え抜いた下半身で繰り出す蹴りのパワーは圧倒的。大学卒業後も働きながら鍛錬を続ける予定で、「日本拳法をライフワークにしたい」と話している。

「成人男子の部」の大阪府代表。左から３人目が角野

柔道

男子第68回・女子第28回・全日本学生柔道優勝大会
6月22、23日 東京都新宿区・日本武道館

男女とも2回戦敗退

日本武道館で行われた全日本学生柔道優勝大会（男子68回、女子28回）に、大阪体育大は男女とも出場した。5月26日に行われた男子69回女子27回関西学生柔道優勝大会で、男子は1部A（8校）の最下位になり、全国大会出場を賭けて対戦した1部Bの京都産業大に勝利してギリギリのところでつかんだ武道館への切符だった。女子は関西大会で6校中4位（女子5人制）の成績で、出場を手にした。

全日本大会は、男子はチーム7名、女子は5名の得点による団体戦で行われた。

男子は初日の6月22日、1回戦の城西国際大戦で、4勝1敗2引き分けで勝利し、翌23日の2回戦に進出。2回戦の相手は、今大会をベスト4まで勝ち上がった強豪の日本体育大。果敢に挑んだが、全敗して今大会を終えた。

女子は1回戦、鹿屋体育大と対戦し、2勝2敗1引き分けで、一本勝ちと反則負けの合計数が上回り2回戦に進出。続く2回戦では、桐蔭横浜大に3敗2引き分けとなり、今大会の挑戦は終了した。

剣道

男子第67回・女子第53回・全日本学生剣道選手権大会
6月29、30日 大阪市・エディオンアリーナ大阪

西日本学生剣道大会 男子ベスト16、女子ベスト8

個の力を結集し、チーム力を高めて秋のインカレ（団体戦）での雪辱を誓う！

おおきにアリーナ舞洲（大阪市）で5月19日に行われた関西学生剣道選手権大会（男子67回、女子49回）には、全日本学生選手権大会への出場をかけて、大阪体育大から男女6名ずつ出場した。男子は主将の高橋寛生（体育4年）、井上夢斗（同）、興梠太一（同）、椋梨昂竜（体育3年）、石本大来（同2年）、伊崎理倫（同）。女子は、主将の北野舞（体育4年）、副将の前田ひかり（同）、谷口優（同）、三木あずみ（同）、福永らら（体育3年）、北川真優（同2年）。石本と北川の2年生男女が全日本選手権大会の出場権を獲得した。

その翌週、福岡県で行われた西日本学生剣道大会（男子64回、女子34回）では、昨年は男女アベック優勝を果たしたが、今年は男子ベスト16、女子ベスト8だった。

6月29日、30日にエディオンアリーナ大阪（大阪市）で開催された全日本学生選手権大会（男子67回、女子53回）では、女子の上段選手である北川が、1回戦、強豪の国士舘大学の選手を相手に、途中休憩を挟む20分を超える大延長戦を制し、3回戦まで進むものの、ベスト16には届かなかった。男子の石本は東洋大の上段選手に見事な相面で1本先取したが、その後、守り切れず2本返され、初戦敗退した。

北川は、「自分の弱点が分かる良い経験をした。秋の団体戦（全日本学生剣道優勝大会）もメンバーに選ばれるよう頑張りたい」と話し、石本は、「1本打って逃げ切るつもりだったが、慌てて打たれたところから相手に流れを持っていかれた。1本を死守して勝ちにつなげるようにしたい。今日の反省を踏まえ、秋の団体戦の予選（関西学生剣道優勝大会）に臨む」と語った。

女子の那須恵美監督は「自分たちはまだまだ弱いという自覚を持って稽古に励むのが大事で、そうすれば秋の団体戦に向けてやるべきことは自ずと見えてくる」と言い、主将の北野は「最後の年になる4年生が頑張らなくては。4年生がしっかり稽古し、下級生にも十分に稽古できる環境を作って、秋に大勝利をもぎ取れるよう頑張りたい」と抱負を述べた。

男子の村上雷多監督は、昨年の第66回全日本剣道選手権大会に大阪府代表で出場し、ベスト16に入った腕前。今の剣道部を「力不足は明らか。このままではいけないという認識は学生も私もある。団体戦に向けゼロからスタートの気持ちで鍛え抜く」と語った。主将の高橋は「関西大会から全日本大会まで通して見ると、大事なところで勝てていない。技術だけでなく気持ちで負けている。練習で自分にプレッシャーを与えること、練習の苦しい、きついところで声を出して、自分を奮いたたせることをやっていきたい」と強い決心を述べた。

石本大来（体育２年）

北川真優（体育２年）

硬式テニス

2019年度関西学生春季テニストーナメント本戦
5月26日～6月1日 大阪市・ITC靭テニスセンター

関西学生春季テニストーナメント本戦の男子シングルスで、大阪体育大の小林泰晴（体育3年）がベスト32に入り、女子ダブルスでは、田野美月（同）・上野胡桃（体育1年）組がベスト16入りした。今大会は8月に岐阜市で開催される2019年度全日本学生テニス選手権大会（インカレ）の予選を兼ねており、小林と田野・上野ペアは出場権を獲得。女子硬式テニス部がインカレに出場するのは2015年以来4年ぶり。

予選を含めると関西学生春季テニストーナメントには男子約700名、女子約300名が出場する。インカレに出場できる選手は、男子シングルスは26名、女子ダブルスは16組に限られ、関西1部リーグに所属する関西屈指のトップ選手ばかり。大阪体育大の硬式テニス部は男子2部、女子3部で、このランクに所属する選手がインカレ出場権を手にするのは極めてまれだ。

小林がインカレ予選選考で戦ったのは関西1部に所属する選手ばかりだったが、フルセットにもつれ込むギリギリの戦いを勝ち進んで最終戦を迎えた。最終戦の相手は昨年度のインカレでベスト8に残った選手。小林は、得意のストロークで正確かつ粘り強いプレーを見せ、フルセットで破ってインカレ予選出場の切符をつかんだ。

田野・上野組（体育3年・同1年）は、予選を勝ち抜いて関西地区で32組だけが出場できる本戦に出場した。上野は4月に入学したばかりで大学の公式戦は今大会が初めて。2人はミスのない落ち着いたプレーで試合の主導権を握り、見事初戦を突破してインカレ予選出場を決めた。

小林、田野・上野組は、いずれもインカレ初出場。チャレンジャーの勢いに乗った活躍が期待される。

田野（右）・上野ペア

小林泰晴（体育３年）

硬式野球 女子

無念の準Vも創部以来初の快挙

第5回全国大学女子硬式野球選手権大会

5月18、19日　高知県安芸市・安芸市営球場

関東のチームから初勝利

全国の大学から女子硬式野球部8チームが集まる第5回全国大学女子硬式野球選手権大会が5月18、19日、高知県安芸市の安芸市営球場で開催され、大阪体育大学は準優勝した。

女子硬式野球部のメンバー

至学館大学戦で完投した横井千晃（体育３年）

初戦の至学館大学戦では、4番辻花菜子（体育3年）が初回に適時二塁打を放ち、先発の横井千晃（同3年）が7回を完投し3―1で勝利した。準決勝の平成国際大学戦では、3回に相手の四球で出塁し先制、4回に安藤聖奈（同4年）の適時打を絡めて2点を追加し3―1で勝利を収めた。関東のチームを相手に勝利したのは創部以来初の快挙だ。

平成国際戦　先制のホームを踏んだ松崎梨那（体育４年）

平成国際戦　適時打を放つ安藤聖奈（体育４年）

決勝の環太平洋大学戦では、勢いのある相手の打線の流れを断ち切ることができず、7―0xのコールドゲームで無念の敗北。横井光浩監督は「今年もあと一歩のところにある『優勝』は遠かった。最後の一歩をどう踏み込むか、チーム全員でしっかり考えたい」と大会を振り返った。

準優勝したことで8月に愛媛県松山市で開催される「全日本女子硬式野球選手権大会」への出場権を獲得。主将の松崎梨那（同）は「今大会で優勝を逃した経験をもとに、もう一度、チームを引き締め直し、一丸となって目の前の一戦を全力で戦っていく」と夏への意気込みを語った。春の悔しさを晴らすために夏の全日本選手権大会へ向けて、「チーム一丸」をモットーに、新しいスタートを切った。

須田麻祐子（体育4年）

バドミントン

男子2部準V 女子2部3位

4月29日～5月5日

男子1部復帰

2019年度関西学生バドミントン春季リーグ戦

2019年度関西学生バドミントン春季リーグ戦が4月29日～5月5日に開催され、男子は2部準優勝、女子2部は3位と男女とも好成績を収めた。小島優希（体育2年）は女子2部の優秀選手賞（バドミントンマガジン賞）を受賞した。

小島優希（体育２年）

関西学生バドミントンリーグ戦は、関西地区の加盟大学男子51校、女子50校の男女各5部リーグ制で実施。大阪体育大学の男子は、5月12日に行われた1部と2部の入れ替え戦で関西大学を破り、上位8校で構成する1部復帰を果たした。

ラグビー

秋のリーグ戦に向けて 「ヘラクレス軍団」復活目指し

春季T1回戦敗退も、「本番は秋」

大阪体育大ラグビー部は、2017年12月のABリーグ入れ替え戦で勝利し、3年ぶりにAリーグに復帰。昨年はAリーグでの試合経験がない選手ばかりで、ハイレベルの戦いに苦しみながらも、入れ替え戦に勝ってAリーグに残留した。Aリーグ復帰2年目の今年の目標は9月から始まる公式戦「関西大学リーグ戦」でAリーグ8校のうち4強に入り、冬の全国大学ラグビーフットボール選手権大会に出場すること。80年代に平均体重100㌔「ヘラクレス軍団」の異名を取った大体大ラグビー部の巨体集団復活を目指し、ゲーム練習だけでなく、厳しい筋トレに励んでいる。

関西大学春季トーナメントの立命館大戦

4月に開幕した関西大学春季トーナメントは5月19日の一回戦で立命館大に12―63で敗北し、その後、一回戦の敗者同士の近畿大との試合も27―48で敗れた。幸先が悪い年度スタートに見えるが、中谷誠監督は「春のトーナメントは秋のリーグ戦の組み合わせを決めるために行われる腕試しのような準公式戦。本番は秋です！」と意欲満々。どの大学も4年生を中心にチーム構成するのが大学ラグビーの常識だが、大体大は4年生15人が教育実習で試合から抜けており、主力のいないトーナメント戦だった。

秋のリーグ戦に向けては、フィジカルを全面に出した激しいプレーが思う存分できるチーム作りを目指す。中心となるのは3人の4年生。キャプテンのBK山下真之介（体育4年）は足の速さとタックルを跳ね返すパワーの双方を持ち、FWの山下剣士（同）と助田凌雅（同）は鍛え上げた約100㌔の肉体で戦車のごとく力づくで前進する。授業終了後の午後4時台から練習が始まるのが大体大のカリキュラムだが、選手らは授業のない空き時間にもウェイトトレーニングを行うなど体づくりに余念がない。

奥村惇太（体育３年）　石本康二（体育４年）

楽しくレースできた

5月19日／和歌山県白浜町

第6回南紀白浜トライアスロン大会で、大阪体育大は宮本恒平（体育3年）が男子総合8位、年代別（24歳以下）で見事1位になり、女子では畑中杏香（体育2年）が女子総合15位、年代別（同）で3位に入った。宮本は「前日に水をたくさん飲んで体に水分を溜めておくのですが、飲むペースの配分を間違えて当日は腹がチャプチャプ。体調万全とは言えなかったけど、楽しくレースできたと思います」と振り返った。

宮本のラン

宮本のバイク

トライアスロン
第６回南紀白浜トライアスロン大会

【各種競技記録】

（順不同）

アルティメット部
◆文部科学大臣杯第44回全日本アルティメット選手権大会　関西・中国四国地区予選（6月22～23日、サニアパーク菅平）
【男子】
大体大　13―10　トリガー
大体大　4―13　文化シャッター
大体大　6―13　Nomadic Tribe
大体大　8―11　信州ルーツ
大体大　12―6　プラムボンズ
大体大　12―11　SAMURAI
【女子】
大体大　11―7　ZUKI
大体大　9―13　壱
大体大　6―13　MUD
大体大　11―12　夢所属
大体大　11―13　中京大

新体操
◆第61回関西学生体操選手権大会　新体操の部（4月27～28日、花園大）
第11位　高橋卓見（教育4年）

ソフトテニス部
◆関西学生ソフトテニス春季リーグ（5月3～4日、マリンテニスパーク北村）
【男子】
大体大　5―0　大教大
大体大　2―3　大商大
大体大　2―3　近畿大
大体大　3―2　桃山学院大
大体大　4―1　大阪成蹊大
3勝2敗　2部3位
【女子】
大体大　2―1　甲南女子大
大体大　3―2　桃山学院大
大体大　4―1　大阪成蹊大
3勝2敗　2部3位

ソフトボール
【男子】
◆第51回春季関西学生ソフトボールリーグ戦（4月29～21日、なみはやG）
▽1日目
大体大　2―9　龍谷大
▽2日目
大体大　11―2　大経大
▽3日目
大体大　5―6　神戸大
大体大　10―2　同志大
◆第54回全日本大学男子ソフトボール選手権大会　近畿地区予選（5月2～3日、なみはやG）
▽1日目
大体大　8―1　大経大
▽2日目
大体大　12―4　龍谷大
【女子】
◆第71回全日本総合女子選手権大会　大阪府予選会（5月1～19日、大阪大谷大）
大体大　1―6　羽衣学園大

硬式テニス
【女子】
◆関西学生春季テニストーナメント予選（4月27日～5月7日、大阪体育大学ほか）
大体大（阪本、烏野）　0―2　親和女子大

ライフセービング部
◆第32回全日本ライフセービング・プール競技選手権大会（5月18～19日、横浜国際プール）
【男子】
▽男子4×50mメドレーリレー
入賞（8位）
上田祥摩（体育2年）、久保愛斗（体育4年）、徳原希偉斗（体育2年）、溝上直弥（体育2年）

大体大（藤井、松下）　0―2　大教大
大体大（船江、烏羽）　0―2　関学大
大体大（定、山崎）　0―2　立命館大
▽シングルス4回戦目
大体大　阪本彩美（体育4年）　1―2　関西大　鈴木理子
大体大　烏野銀（体育2年）　2―1　武庫川女子大　金森美鈴
大体大　上野胡桃（体育1年）　0―2　大教大　北村梨乃

令和最初のOUHSスポーツで大阪体育大アスリートたちの今年度前半の熱戦をお伝えしました。後半は次号でお楽しみに!!

陸上競技

2019日本学生陸上競技個人選手権大会

6月7日～9日
神奈川県平塚市・Shonan BMWスタジアム平塚
（ハンマー投げは東海大学湘南校舎陸上競技場）

男子やり投げ 坂本が優勝 投擲に地力

6月の2019日本学生陸上個人選手権大会（全日本インカレ）に、大阪体育大学からは男女10人ずつ計20人が出場。男子やり投げで坂本達哉（大学院1年）が優勝するなど、投擲競技で地力を示した。

決勝8人中3人が大体大

石坂 6位　亀井 8位
女子ハンマー青柳 7位　高橋 8位
砲丸　山本 8位

女子砲丸投げの山本遥（大学院1年）

男子ハンマー投げで3位となった吉野健太朗（大学院2年）

女子ハンマー投げ8位の高橋沙湖（体育4年）

女子ハンマー投げ7位の青柳栞（体育3年）

大体大投擲を牽引する存在感

やり投げの学生チャンピオンとなった坂本は、この競技について「どれだけ遠くに飛ばすかどうかだけを競う単純明快なところが好き。すごい飛んだ、って見た目にも分かりやすくて面白い」と言う。188㌢、93㌔の日本人としては恵まれた体格。全日本インカレでの勝因を「冬季のトレーニングで基礎体力が強化でき、けがをしなくなったので万全の体調で競技に臨めた」と分析する。

やり投げ始めたのは愛知県立一宮高校時代。大阪体育大では「全国トップレベルの先輩方と一緒にトレーニングできたのは大学生活の宝物。フォームを見てもらって改善に取り組んだ」と先輩に感謝。日ごろはチューブを使ったウエイトトレーニングや、サンドボールをひたすら壁にぶつけるなど地味な鍛錬の積み重ねだ。坂本は「あまり苦手な練習がないので、やり投げに向いていたのかな」と淡々とこなしている。

目標は世界選手権の参加標準記録83㍍を突破すること。やり投げは力任せに投げれば飛ぶというものではなく、やりを手放す際のわずかな角度の差が飛距離に影響する。力を発揮する頑丈な肉体と、助走からリズムに乗る繊細さの双方が要求される。「やりを投げる瞬間の構えの時に、左右の足にバランスよく体重が載っていると飛距離が出る。後方の右足に体重が載りすぎているとやりが止まってしまう。前方の左足のブロックをしっかりすることができれば、83㍍は飛ばせると思う」と目標達成向けての課題を述べる。

大学院を卒業しても実業団でやり投げを続けるのが将来の希望。まだまだ進化した姿を見せてくれそうだ。

◆　◆　◆

6月21～23日、京都市の西京極総合運動公園陸上競技場で行われた秩父宮賜第72回西日本学生陸上競技対校選手権大会（西日本インカレ）でも大阪体育大の選手が好成績を収めた。

男子5000㍍で大坂祐輝（体育3年）が14分41秒23のタイムで優勝。女子やり投げでは武本紗栄（同2年）が53㍍99で優勝した。女子砲丸投げの山本遥（大学院1年）は14㍍46で2位に、女子ハンマー投げは青柳栞（体育3年）が55㍍67で3位になった。女子100㍍では坂野七海（同1年）が決勝レースに出場し、12秒06で4位になる健闘をした。

やり投げ学生チャンピオンの坂本達哉（大学院1年）

坂本は大学3年の時以来、2年ぶり2度目の出場。2年前の記録、61㍍67から10㍍以上も伸ばし、73・26㍍で学生日本一に輝いた。男子やり投げは決勝戦8選手のうち、3人が大阪体育大の選手。石坂力成（体育4年）が64㍍37で6位となって昨年の10位から順位を上げ、亀井綾介（同）は62㍍62で8位になった。

男子ハンマー投げでは、吉野健太朗（大学院2年）が64㍍48で3位に入った。吉野は大学2年の時から全日本インカレ5年連続出場で、ついに念願の表彰台に上った。

女子ハンマー投げでは、青柳栞（体育3年）が55㍍09で7位、高橋沙湖（同4年）は昨年の6位から8位に順位を落としたが、記録は昨年より約1㍍伸ばした54㍍89だった。女子砲丸投げでは山本遥（大学院1年）が2年前に出場した際の14㍍32（7位）を超えられず、13㍍99で8位になった。

関西インカレ メダルラッシュ

吉野ハンマー投げ連覇
やり投げでは坂本、武本が男女優勝
女子ハンマー投げ・高橋、円盤・渡辺
砲丸・山本も実力示し笑顔の優勝

第96回関西学生陸上競技対校選手権大会T&Fの部

5月9、10日・18、19日
京都市・西京極総合運動公園陸上競技場ほか

今年の関西学生陸上競技対校選手権（関西インカレ）で大阪体育大は、得意競技の投擲を中心に活躍した。男子ハンマー投げで吉野健太朗（大学院2年）が66・44㍍の大会新記録を打ち立てて、昨年に続く堂々の優勝。このほか、男子やり投げの坂本達哉（大学院1年）、女子やり投げの武本紗栄（体育2年）、ハンマー投げの高橋沙湖（体育4年）、女子円盤投げの渡辺七海（体育3年）、女子砲丸投げの山本遥（大学院1年）が、実力通りに優勝を勝ち取り、表彰台で笑顔がはじけた。

トラック競技では、大坂祐輝（体育3年）の健闘が光った。5000㍍ではゴール前でデッドヒートを繰り広げて3位。3000㍍SCでは序盤から先頭を走ってレースを引っ張り、中盤で3位に転落したが、最後は踏ん張りを発揮して2位でゴール。昨年の今大会では3000㍍SCで当時、大阪体育大4年の吉野駆流が優勝しており、大坂は吉野の後継者となる存在感を示した。

女子400㍍リレー決勝には、坂野七海（体育1年）、南本羅那（同3年）、畑咲春（同）、藤原亜実（体育1年）が出場し、46・82秒で走り抜けて5位に食い込んだ。大阪体育大学の持つ女子400㍍リレーの記録を塗り替えるタイムで、4人はレースでもっと上位を目指します」とガッツポーズで更なる記録更新を誓った。

女子砲丸投げ

石坂力成（体育4年）

坂本達哉（大学院1年）

女子円盤投げ

男子やり投げ

渡辺七海（体育3年）

男子5000㍍

女子400㍍リレーのメンバー。左から坂野、南本、畑、藤原

3000㍍SCを力走する大坂

男子3000㍍SC

大阪体育大学の受賞者と記録

◆男子ハンマー投げ
1位　吉野健太朗（M2年）66・44㍍
3位　豊山宇宙（体育4年）57・18㍍

◆男子やり投げ
1位　坂本達哉（M1年）72・91㍍
2位　石坂力成（体育4年）71・87㍍

◆女子ハンマー投げ
1位　高橋沙湖（体育4年）55・03㍍
2位　青柳栞（体育3年）54・87㍍

◆女子やり投げ
1位　武本紗栄（体育2年）53・68㍍

◆女子砲丸投げ
1位　山本遥（M1年）14・50㍍
2位　田村満孔（体育4年）14・46㍍

◆女子円盤投げ
1位　渡辺七海（体育3年）43・62㍍
3位　影山絢香（体育4年）39・75㍍

◆男子5000㍍
3位　大坂祐輝（体育3年）14分21秒16

◆男子3000㍍SC
2位　大坂祐輝（体育3年）9分11秒91